

## 平安時代の仏像胎内に納められたタカラガイ類 — その採集地の推定 —

黒住耐二

千葉県立中央博物館  
〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2  
E-mail : kurozumi@chiba-muse.or.jp

キーワード：タカラガイ 仏像胎内納入品 四天王寺 平安時代 産地推定

### 1 はじめに

平安時代併行期の琉球列島からヤマト（ここでは琉球列島と地理的・文化的に異なる本州・四国・九州を指すこととする）へヤコウガイとホラガイが交易品としてもたらされたことが、近年の研究で明らかになってきている（例えば木下，2002）。これらの貝類は、貝類提供者である琉球側からヤマトへの物品であるが、これらの貝類に伴って、琉球列島産の他の貝類が随伴的にヤマトに新たな商品や「お土産」として送られた可能性を想定することは可能であろう。この随伴的に用いられた貝類の存在を示せたならば、利用された貝類の情報（分布域・生息場所・生息量等）から、実際の交易を担う人々や、さらには琉球側での採集・集積を行う人々といった生産者側の生活の一端を示せることも考えられる。しかしながら、これまでの文献資料や考古学的資料からは、この随伴貝類に関する情報は得られていない。

筆者は、上記のような随伴貝類を検討していた折、金丸（1931）が「伊勢四天王寺の薬師如来像の胎内から子安貝が出たが、此の佛像は藤原時代のもので」あることを記していることを知った。今回、この仏像胎内に納められたタカラガイ類を実見できたので、その結果を報告したい。なお、この仏像中のタカラガイ類は水野（1966）や三重県立美術館編（1986）等にも報告があるが、正確な同定や採集地の推定等は行

われていないので、本稿ではこの点を中心に述べたい。

### 2 検討対象および方法

今回観察したタカラガイ類は、三重県津市の四天王寺にある平安時代に作られた重要文化財「薬師如来坐像」の胎内納入品の一部である。2002年11月に四天王寺を訪れ、同寺が所蔵しているタカラガイ類を実見し、ノギスによる殻サイズの計測と外部観察を行った。

### 3 結果および考察

これまでも報告されたように（水野，1966；三重県立美術館編，1986）、この薬師如来坐像の胎内から確認されたタカラガイ類は2個体であり、今回の同定の結果、大きい方がホシキヌタ *Cypraea vitellus*、小さい方がハナマルユキ *Cypraea caputserpentis* であることがわかった（図1）。両種ともその分布域は、ほぼ房総半島から沖縄までと広く（堀，2000）、琉球列島に多くヤマトに少ない種ではなかった。種の同定から産地の推定は不可能であった。

その計測値は、ホシキヌタが殻長 38.3mm × 殻幅 24.3mm × 殻高 21.0mm、ハナマルユキが殻長 28.7mm × 殻幅 19.1mm × 殻高 15.0mm であった。外部の観察から、このホシキヌタは十分に成長した個体であったが、ハナマルユキは滑層の発達した悪い亜成貝であった。Irie（1997）は日本各

地のハナマルユキの殻形態を詳細に検討しており、その中で今回の資料に関係のある結果としては、殻幅／殻高比では房総半島で1.20-1.36の個体が多く、琉球列島等ではこの値をとる若成貝がほとんど採集されていないということが示されている。今回の仏像胎内のハナマルユキは、1.27と小さな殻幅／殻高比を持つ亜成貝（およそ若成貝と同義）であった。仏像胎内のホシキヌタは、このサイズとしては重厚であり、報告者のこれまでの定性的な観察では、このような個体は琉球列島よりもむしろヤマトに多い傾向にあるように思われる。

つまり、上記のヤマトに多いハナマルユキ亜成貝から、本仏像胎内の本種はヤマトで採集された可能性が高いと考えられる。ホシキヌタ成貝においても、ヤマトでの採集を否定するものではなかった。いわゆる黒潮系のタカラガイ類は、外洋水の影響のある海域に生息し、三重県においてもハナマルユキ・ホシキヌタ両種とも志摩半島以南で確認され、四天王寺のある伊勢湾では確認されていない（松本，1979）。つまり、この両種は伊勢湾内の海岸で得られたものではなく、他地域から持ち込まれたものであることは確実で、最も近い両種の採集地として志摩半島南部が考えられる。

このように殻幅／殻高比に基いた貝類学的検討からは、今回の四天王寺の仏像胎内に納入されていたタカラガイ類の琉球列島からもたらされた可能性は極めて低いことがわかった。当初想定したような交易主体に随伴した貝類の検証という面での成果は挙げられなかったが、今後もこのような視点に立脚した調査は必要であると考えられる。

これらのタカラガイ類の利用方法について、金丸（1931）は「婦人の安産祈願の具であった」と記している。しかし、今回の両標本には後端に2mm弱の小さな略円形の孔が人為的に開けられ、紐が通されており（図1；水野，1966；三

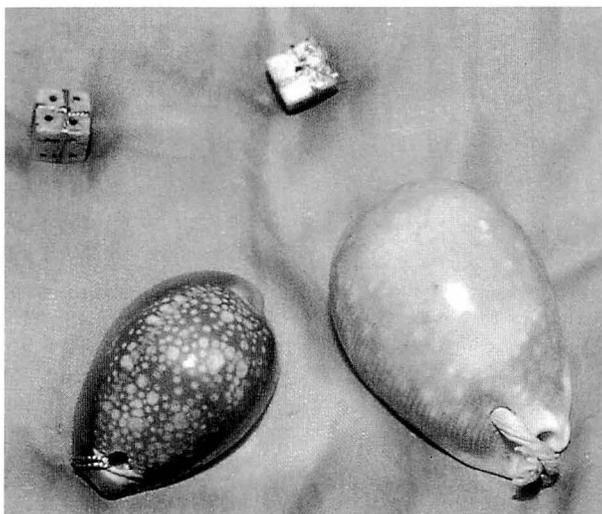


図1. 三重県津市四天王寺の薬師如来坐像胎内納入品のタカラガイ類。

左：ハナマルユキ，右：ホシキヌタ。

重県立美術館編，1986も参照）、安産祈願との関係は考えにくいと思われる。金丸（1931）の記述は、彼が標本を実見できず、新聞報道等によったことにより、種や小孔の情報がないなかでの想像と考えられよう。

タカラガイ類がサイコロと共に仏像胎内に収められていた点は（図1；水野，1966；三重県立美術館編，1986も参照）、これらの遊具としての利用も考えられる。タカラガイ類の後端に孔を開け、紐を通し、曳いて遊具とする例は、奄美・沖縄地方で知られている（例えば川名，1988）。この仏像胎内のタカラガイ類も、このような遊具であった可能性も想定されよう。しかし、今回はヒモズレの詳細な観察等を行っておらず、更に平安時代のヤマトにおけるタカラガイ利用の実態・薬師如来像胎内から得られたことの意味付け等の根本的な問題を検討できていないことから、利用方法を一意に特定するものではない。

今後、仏像胎内のタカラガイ類の類例が増加し、当該時期のタカラガイ利用の研究が進展す

るのではないかと考えられる。その過程で、琉球側からヤマトへの交易品に伴う随伴貝類も確認されることが期待される。

#### 謝辞

貴重な資料を観察させていただいた四天王寺の御住職、文献を御教示頂いた三重県史編纂室の小林 秀氏、本稿を査読頂いた熊本大学の木下尚子先生に御礼申し上げます。本調査の一部には、科学研究費補助金基盤研究(B) (13571038)を用いた。

#### 引用文献

掘 成夫 2000. タカラガイ科. *In* 奥谷喬司 (編), 日本近海産貝類図鑑, pp. 224-241. 東海大学出版会, 東京.

Irie, T. 1997. Relationships between geographic variation of shell structure and water temperature in *Cypraea caputserpentis* (Gastropoda: Cypraeidae). *The Yuriyagai* (5): 17-29.

金丸但馬 1931. 日本貝類學史 (6). *Venus* 2 (5): 243-248.

川名 興 (編) 1988. 日本貝類方言集. 民俗・分布・由来. 321 pp. 未来社, 東京.

木下尚子 2002. 貝交易と国家形成—9世紀から13世紀を対象に—. *In* 木下尚子 (編), 先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—, pp. 117-144. 熊本大学文学部, 熊本.

松本幸雄 1979. 三重の貝類 (三重県産貝類目録). 179 pp. + 4 pls. + 1 map. 鳥羽水族館, 三重.

三重県立美術館 (編) 1986. 三重の美術風土を探る—古代・中世の宗教と造形. 三重県立美術館, 三重.

水野敬三郎 1966. 薬師如来像. 三重県津市榮町四天王寺. *In* 日本彫刻史基礎資料集成. 平安時代. 造像銘記篇二. 図版・解説, pp. 50-56 (図版), 41-47 (解説). 中央公論美術出版, 東京.